『讃岐典侍日記』における「公」と「私」と

鄭 順 粉*
(e-mail: sunbun@pcu.ac.kr)

目　次

1. はじめに
2. 天皇の死の描写
3. 「私」のエピソードの表出
4. 内密な「私」の場面の露出
5. おわりに

1. はじめに

『讃岐典侍日記』は、日記名から明らかなように、堀河天皇に典侍として仕えた讃岐（藤原長子）によって書かれた日記文学である。天皇の傍らに侍した典侍が日記を書こうとした場合、そのパターンには二つがあろう。典侍という職掌から女房日記的な公的な日記を書くか、あるいは身の回りの瑣細なことを中心とした身辺雑記的な日記を書くかである。『讃岐典侍日記』は、公的な性格の日記というには、個人的な視点に立っての主意的な筆致が多く、また身辺雑記というには記述対象が公的に過ぎる。『讃岐典侍日記』は一言では表わせない複雑で多面的な世界をなしており、それについては従来様々な角度から考察が行われてきた。本稿では、先行研究を踏まえながら『讃岐典侍日記』を「公」と「私」の観点から考え、中古（平安時代）から中世にかけて大きな流れをなした女房日記1)の一性格を明らかにしてみたいと思う2)。それは、「公」的な世界から出発した女房日

＊ 培材大学校　日本学科　教授　日本文学

1）女房日記を、女房が書いた記録中心の公的な日記に限って見る立場もあろうが、ここでは女房、あるいは女房であった人が書いた日記という広い範囲の意味で用いることにする。ここで言う女房日記の中には書き手の心中表現に長けて文学作品として見られる女流日記（『枕草子』『紫式部日記』など）も当然含まれる。例えば、宮

www.kci.go.kr

記がいかにして「私」の世界に発展し文学性を獲得するかの問題に一つの方向性を示すことになるだろうと思う。

2. 天皇の死の描写

作者讃岐典侍は、平安後期の官人藤原顕綱の娘で、長子という名であったことが判明している。長子の父である顕綱は、藤原北家道綱流の出身で、讃岐・丹波・和泉・但馬などの受領を歴任し、正四位下に至った人物であるが、その一方では勅撰集に二十五首採られた家集『顕綱集』を遺すなど、歌人としても知られていた3)。その顕綱の母も後三条天皇生母である禎子内親王（のちの陽明門院）の乳母を勤めた弁乳母で、やはり歌人として活躍していた。顕綱一門にある程度文学的な雰囲気があり、白河天皇・堀河天皇の治世下で一定の存在感や影響力をもっていたことがうかがわれる4)が、続いて長子の姉である兼子も、堀河天皇の乳母を勤めて、堀河天皇即位の折りには褰帳役を担い、この兼子との繋がりから長子が堀河天皇のもとへ出仕したものと見られる。

長子の役職である典侍は、内侍司（後宮）の次官で、天皇の傍らに侍して宮廷の行事や神事などを掌った高位の女官である。天皇の后（中宮・女御・更衣）に仕える後宮女房とは異なる、いわゆる内裏女房である5)。それまでの女房日記が主に後宮女房によって営まれていたことを考え合わせると、内裏女房である長子によって書かれた『讃岐典侍日記』は、平安女房日記の中で異質な面を有する。

『讃岐典侍日記』の執筆の契機については、日記冒頭に次のように表わされている。

五月の空もくもらはしく、田子の裳裾もほしわぶらんもことわりと見え、さらぬだにものむつかし

崎荘平（1989）「宮廷女房日記の展開―中古から中世へ」（『日記・随筆・記録（日本文学講座）』7 大修館書店）などにも女房日記が広義の概念で用いられている。pp.110-129

2) 女流日記文学全作品の系譜については、岩佐美代子（1993）「女房の日記」（『語文（日本文学）』85）に詳しく論じられている。pp.6-17
また、森田兼吉（1995）「記録としての日記の考察―日記文学前史」（『日本文学研究（梅光女学院大学）』30）にも述べられている。pp.29-42

3)『蜻蛉日記』の作者の子藤原道綱の孫にあたる。

4)『讃岐典侍日記』の作者藤原長子については、守屋省吾（1990）「『讃岐典侍日記』の作者藤原長子」（『女流日記文学講座第四巻』勉誠社）に詳しく述べられている。pp.258-272

5) 木下順子（1992）「『讃岐典侍日記』成立の背景―出仕した八年をめぐって」（『新樹』5）には、長子が出仕した八年において、康和五年の、堀河天皇の女御苡子と長子の父顕綱の死、長治二年、翌嘉承元年の天皇の病といった事柄が、作者長子と天皇との関わりの上で、非常に重要な節目であったと述べられている。pp.1-10

www.kci.go.kr

きころしも、心のどかなる里居に、常よりも昔今のこと思ひつづけられて、ものあはれなれば、端を見出だしてみれば、雲のたたずまひ、空のけしき、思ひしり顔にむら雲がちなるを見るにも、「雲居の雲」といひけん人もことわりと見えて、かきくらさるる心地ぞする。軒のあやめのしづくもことならず。山ほととぎすももろともに音をうち語らひて、はかなく明くる夏の夜な夜な過ぎもていそのかみ古りにし昔のことを思ひ出でられて、涙とどまらず。

思ひ出づれば、わが君につかうまつること、春の花、秋の紅葉を見ても、月の曇らぬ空をながめ、雪の朝御供にさぶらひて、もろともに八年の春秋つかうまつりしほど、常はめでたき御こと多く、朝の御おこなひ、夕べの御笛の音忘れがたさに、なぐさむやと、思ひ出づることども書きつづくれば、筆のたちども見えず霧りふたがりて、硯の水に涙落ち添ひて、水くきの跡も流れあふ心地して、涙ぞいとどまさるやうに、書きなどせんにまぎれなどやするとて書きたることなれど、姨捨山になぐさめかねられて、堪へがたくぞ。6)

曇りがちな五月のある日、昔のことが思い出されて涙が止まらないが、その昔のこととは、わが君（堀河天皇）に仕えた八年間のことである。春の花・秋の紅葉や、月夜・雪の朝などの風情のある時のみならず、平素にも素晴らしい思い出はいくらでもあり、中でも、朝の勤めや夕吹かれた笛の音は特に忘れがたい。思い出されることを書いてみれば少しでも慰まれるかと思い筆をとってみたものの、涙は溢れるばかりで、寂しさは増すばかりである。

日記全体を視野に入れた序文らしく、古歌のことばや対句を用いるなどして改まった筆致となっているが、日記を執筆した意図がどこにあるのかを率直に示し、自分の心情を訴えている。作者は、八年間仕え、今は亡き天皇の堀河帝を偲び、悲しみをまぎらせようとして筆をとったと言う。つまり、この日記は、天皇の死をきっかけとして執筆されており、上巻には堀河天皇の発病から死に至るまでの約一ヶ月間が、また下巻には堀河死後に白河院の要請を受け鳥羽天皇の下へ再出仕してからの作者の一年余の日々が描かれるようになる7)。

作者長子が日記の中で中心的に述べている天皇の死という素材は、それまでの女房文学では極めて稀なものである8)。天皇は、この上なき尊い存在として、平安時代の女房日

6) 『讃岐典侍日記』の本文引用は、石井文夫（1994）の新全集本（小学館）による。以下同様。pp.391-392

7) 武藤菜海（2010）「『讃岐典侍日記』執筆意図とその背景について」（『国文目白』49）においては、執筆意図について「鳥羽天皇の下での出仕生活にやりがいを感じながらも一方で、過去を忘れ現実を受け入れていく自分自身に堀河天皇をひたすら追慕し現実に違和感を覚えた」ためであるとする。pp.180-189

8) 当時、人が死ぬことは「はかなくなる」と思われ、帝が死ぬことは「かくれる」と思われていた。すなわち、天皇という至高の存在の死をつぶさに描くことは、普通の人間の死と同一視することで、失敬のことになりかねなかったのである。しかし『讃岐典侍日記』は、天皇の側近で仕えた典侍だったからこそ、天皇の死を描ける視座を特別に獲得したものと見られる。大長編の『源氏物語』の中にも、死の場面が具体的に描かれているのは、「桐壷」巻の桐壷更衣の死と、「御法」巻の紫の上の死ぐらいである。但し、歴史的な事件を扱った歴史物語（例えば『栄花物語』）には、天皇の死が語られる。

www.kci.go.kr

記の中には具体的に描かれることすら憚れていた。後宮女房の場合、天皇に直接接することも少なかったし、この世を去る崩御の場面に立ち入ることはなおさらなかった。天皇崩御は政治的・歴史的な事件なのであくまでも男性官僚の領域に属するという認識があり、女房日記に描かれることはなかったのである。天皇の死は、一般的に史書に代わる歴史物語の中に描かれる9)か、男子官人の漢文日記に記されるかであった。堀河天皇の死も、当代の関白藤原忠実の日記『殿暦』や右大臣藤原宗忠の日記『中右記』の中には国の大事として詳細に記述されている。そういう意味で、『讃岐典侍日記』も、典侍という役目から出発しており、それだけ公的な性格が強いものとも見られるが、その世界はそれまでの後宮女房の日記に衰えず、かなり個性的である。以下、それについて『殿暦』や『中右記』と比較しながら、作者長子の「私」的な視点から描かれた堀河天皇の死の場面を見ていくことにする。

『讃岐典侍日記』の上巻では、①発病、②重篤、③崩御と、時間の順によって堀河天皇の死が述べられ、まず死に至る病そのものを見据えて発病の様子が次のように起筆される。

> 六月二十日のことぞかし、内は、例さまにもおぼしめされざりし御けしき、ともすればうち臥しがちにて、「これを人 はなやむとはいふ。など人々は目も見立てぬ」とおほせられて、世をうらめしげにおぼしたりしものを、こと重らせさせたまはざりしをり、御祈りをし、つひにありける御ことをもゆづりまゐらせらるると、わがさたにもおよばぬことさへぞおぼゆる。10)

堀河天皇の気分が平素とは異なるにもかかわらず、関白以下側近の廷臣らは、特別な注意を払わずに無視しており、作者長子はそれを胸を痛む思いで述べている。

廷臣側としては、天皇のことだから、病状をみだりに重篤と判断することは、至尊に対し礼を失い、かつ皇位交替にもかかわる事ゆえ容易に口に出すことはできないだろう。しかも、堀河天皇の病気は今回だけではなく、数年にわたり、発作と小康の反復の末、一往の治癒、という常態となっていた。下手な速断で巨費を伴う大規模な加持祈祷などを主張するわけにはいかなかったのである。そのような廷臣たちの立場は、漢文日記にも如実に表わされ、『中右記』の当日の記事には、「此の夜伴より、主上頗る御風気御也、然りと雖も又指したる事御さず」とあり、天皇の異常状態についてすぐ対処しようとはしない様子が感じ取られる。『讃岐典侍日記』は、公的な事務だけを考える廷臣の立場から書かれた男性の漢文日記とは異なって、女房なればこそ親しく手を下して帝を看護しつつ、天皇の

9) 石坂妙子 (2003) 「〈典侍〉讃岐の日記—『栄花物語』の継承」 (『王朝女流文学の新展望』竹林舎) には、『讃岐典侍日記』が周防内侍を先達と仰ぎ、『栄花物語』に準ずる崩御記を書き残そうと試みたものとする。pp.45-61

10) 前掲書 pp.392-393

www.kci.go.kr

飾らぬ発言や行動をありのままに愛情をこめて描写しているが、そのような個性的な文章の叙述は、回想という方法によって可能であったと見られる。

典侍の長子も、それが崩御につながる重病の始まりであることはその時点では気づかなかったであろう。だからこそ、今、天皇の死を振り返りながらあの日の軽率さと無知を後悔せずにはいられないのである。なぜ「など人々は目も見立てぬ」という天皇の言葉に耳を傾けなかったのか、もしそれを真剣に受け取ってすぐ対処したら崩御に至らずに済んだのにと、遅ればせながら悔やむ思いでいっぱいなのである。

日記文学は、もともと出来事が起きた時（過去）と執筆する時（現在）とが異なる。出来事自体は過去のものであるが、それを見る目や心情は執筆する現在のものである。その執筆の時の作者の主観や内面の表出が、単なる出来事の記録である日記と区別せしめる特徴になるわけであるが、日記文学は、過去の出来事そのものも作者の意図によって選び取られ、意味付けられる。堀河天皇の死について書き記す『讃岐典侍日記』上巻では、発病した六月二十日のあと、直ちに七月六日の記事に移っているが、それはその日に天皇の病気が重態に陥ったからである。

> かくて、七月六日より御心地大事に重らせたまひぬれば、たれも、月ごろとても、例さまにおぼしめしたりつることは、かたきやうなりつれども、これがやうに苦しげに見まゐらすることはなくて、過ぐさせたまへる、かくおはしませば、いかならんずるにかと、胸つぶれて思ひあひたり。（中略）
> 日の暮るるままに、堪へがたげにおぼしめしたれば、院にかくと案内申さする。「おどろかせたまひて、近くて御有様聞かんとて、にはかに北の院に御幸ありて」と奏す。
> かく苦しうおぼしめしたれば、大殿油例よりも近く参らせなどするほどに、ただ消えに消え入らせたまひぬ。11)

病がちであった堀河天皇の容態がこの度は今までになく苦しげで、死の影が近づくほどに病が進行したことが描かれ、それに胸がつぶれる思いでいる作者の個人的な感情状態が述べられる。

この日から堀河天皇は重篤の危機になり、特に夜伴には、一時人事不省の状態で内大臣源雅実や関白藤原忠実まで慌てさせる事態にいたった。天皇は再び意識を取り戻すものの、重篤の様は誰の目にも明らかである。その様子について、『殿暦』や『中右記』には、「主上御風の気、此の七八日指したる事御さずと雖も、又尋常常の儀に非ざる」（『中右記』七月三日）状態が続いたことや、六日夕刻白河院も急遽近傍の令子内親王御所に御幸した際に、帝が「御樋殿に渡り給ふ程、道にて不覚に御す」（『殿

11）前掲書 pp.393-394

www.kci.go.kr

暦』七月六日）ことが書かれ、臨時免物・非常赦・軒廊御占などの官僚的対応が主に記されている。

それに対し、『讃岐典侍日記』は、この七月六日から七月十九日崩御になるまでの過程を私的な時間を追いながら一つ一つ克明に描いている。ここで、私的な時間とは、「かくて七月六日より」以後、「日の暮るるままに」「明け方になりぬるに」「昼つ方になるほどに」「夕つ方」「暮れはてぬれば」「かくいふは十五日のこととぞおぼゆる」「十七日の暁に」「明けぬれば」などと、時間表示が大まかで不鮮明になされることをさす。漢文日記の場合は、例えば、『中右記』に「五日、亥の時ばかり玉体頗る温気に御す也」（嘉承二年七月五日）とあるように、日にちだけでなく時刻の記載もなされる場合が多い。それは、漢文日記が公的な時間性に基づき、外在的な時間の枠組みに依拠して示される構造であることを表わす。しかし、『讃岐典侍日記』には具体的な日にちを示した場合は少なく、作者個人の私的な時間、すなわち内在的な時間を基底にしている。つまり、堀河天皇の看病記としての『讃岐典侍日記』は、男子官人の実録とは異なり、あくまでも作者長子の私的な視線によってとられた堀河天皇の病から崩御にいたる過程を描いているのである。作者長子は終始天皇の容態を見守りながら、客観的な時の流れにとらわれずに、敬愛する天皇の病状の推移を軸にして、行動したこと、見聞きしたこと、感じたことを書き綴っているのである。この七月六日から崩御の直前までは、看病の手不足から、急変による周囲の周章、加持調伏の騒音、これに対する病者自身の状況判断などが、実に生々しく写し出される。特に、主人公である天皇は、廷臣らに対しては自らの死につき、主導権を持って対応を指示しているものの、近侍の女房に対しては本音で不満をもらす12)人間味あふれる人物として描かれる。漢文日記の中には見られない、天皇の生の姿が臨場感溢れるかたちで表わされるのである。

いよいよ臨終から崩御にいたるクライマックスの場面であるが、次のように描かれている。

> 念仏いみじく申させたまふさまこそ、ことのほかなれ。ともすれば、「大神宮、助けさせたまへ」と申させたまへど、そのしるしなく、むげに御目など変はりゆく。僧正、とみに参らせたまはず、ややひさしくありて参らせたまへれば、日ごろへだつれど、何のもののおぼえんにかものはづかしともおぼえん、ただひとつにまとはれて、僧正、三位殿二人、御前、わが身、五人の人々、ひとつにまとはれあひたり。声を惜しまず、頭よりまことに黒煙立つばかり、目も見開けず念じ入りて、仏をうらみくどき申さるるさま、いとたのもし。（中略）人などをいふやうに、「おそし、おそし」とあれど、何のしるしもなくて、御口のかぎりなん念仏申させたまへるも、はたらかせたまはずならせたまひぬ。13)

12) 太田たまき（1997）「『讃岐典侍日記』に見る典侍の局と天皇の行動範囲の一考察」（『日記文学研究』2）には、天皇の日常について説かれ、天皇が女房の局に行くこともあり、作者長子の局に行ったこともあろうと論じられている。それぐらい天皇と長子は打ち解けていた間柄だったとする。pp.266-276

www.kci.go.kr

嘉承二年（一一〇七）七月十九日、僧正が声を惜しまずに祈り訴える中で、念仏を唱える天皇の口がついに動きを止めた。堀河天皇は、増譽僧正、大臣殿の三位、大弐の三位、讃岐典侍の四人が近々と看取る中で崩御したのである。

天皇という至高の存在の死の瞬間をこれまで凝視し、接近して描写したものが、王朝女流文学の中にほかにあるだろうか。人は「はかなくなる」ものであり、特に帝は「かくるる」ものであったはずである。それが浮腫の徴候から記述し、死を直前にしての間断ない発汗、胸のせきあげ、体温降下、目の変化、動きの停止、さらには死後硬直に至るまで、人間の肉体の変質をつぶさに叙述していく。作者長子の筆が緊迫した迫力のあるものになっており、それだけ長子の感情の高まりを表わしている。

これを、『殿暦』は、「寅の時許り、主上御冠を着けしめ給ひ、法華経を読ましめ給ふ。希有の事也、人々涙を流す。……辰の時許り、御念仏幷びに御経宝号を実に能く能く唱へ給ひ、崩じ給ふ此の間、余、御前に候す。内府之に同じ」と記し、『中右記』は、「暫く巳の刻に及び、関白殿鬼の間障子口に走出で、密語し給ひて予に仰せられて云はく、主上辰の刻計り御気已に断たせ給ふ也、但し先づ自ら大般若法華経号、幷びに不動尊宝号を唱へ、次に釈迦弥陀の宝号を唱へ、西方に向はせ給ひ、身体安穏、只睡眠に入り給ふが如く也」と記す。廷臣としての公式的な発言と、死の床に侍して帝と共に死と闘った作者長子の筆による『讃岐典侍日記』との落差は一目歴然である14)。

『讃岐典侍日記』は、上巻の「崩御の記」と下巻の「追慕の記」との二部構成15)で堀河天皇の死を表現しているが、特に上巻においては、天皇の死そのものが直接に描写され、女房文学の中では特色ある世界をなしている。天皇の身にかかわる大きな出来事として死の場面を書き記したことは、天皇に仕える女房（典侍）という作者の公的な立場から出たものとはいえ、天皇という至尊の尊厳性を越えているかに見えるリアルで細かい記述表現や、作者長子の個人的な感情の表出は、ただ主人に仕える女房としての公的な使命感以上の何かを思わせる。堀河天皇の死は、この『讃岐典侍日記』において歴史的な事件としてではなく一つの人間の死として感動的で美しく再構築されているのである。

13）前掲書 pp.417-418

14）この天皇崩御の場面は、日本文学史上唯一の、一人の人間としての天皇の死を虚飾なく描いたものとして知られている。

15）嘉承二年（一一〇七）七月十九日の崩御から、十月一日、新帝に出仕せよとの院宣が下るまで、その間二ヶ月あまりの記事が、現存の本にはない。そこで、現存の上巻と下巻の二巻構成ではなく、もともとは中巻があって三巻構成ではないかと推定する説もある。しかし、ここでは論旨の展開の上で差し支えがないので、二巻説に従っておく。
森本元子（1990）「『讃岐典侍日記』の成立―その心理と経緯」（『女流日記文学講座』第四巻　勉誠社）。pp. 213-227

www.kci.go.kr

3．「私」のエピソードの表出

そのような『讃岐典侍日記』における作者長子の個人的な側面は、天皇の死を描く叙述態度だけにとどまるものではない。天皇の死という絶体絶命の瞬間を描きながらも、その合間に作者の個人的なエピソードを挟み込んで語る。次の場面を見てみよう。

> 日の経るままに、いと弱げにのみならせたまへば、このたびはさなめりと見まゐらするかなしさ、ただ思ひやるべし。一昨年の御心地のやうにあつかひやめまゐらせたらん、何心地しなんとぞおぼゆる。
> また、人、「のぼらせたまへ」と呼びに来たれば、参りぬ。もの参らせこころみんとてなりけり。大弐の三位、御うしろに抱きまゐらせて、「もの参らせよ」とあれば、小さき御盤にただつゆばかり、起き上がらせたまへるを見まゐらすれば、今日などは、いみじう苦しげによにならせたまひたると見ゆ。殿のうしろのかたより参らせたまひけるも、例のやうになどして参らせたまふこそしるけれ、このごろは、たれも、をりあしければうちしめりならひておはしませば、いかでかはしるからん。「大臣来」と、いみじう苦しげにおぼしめしながら告げさせたまふ、御心のありがたさは、いかでか思ひ知られざらん。かく、苦しげなる御心地にたゆまず告げさせたまふ御心の、あはれに思ひ知られて、涙浮くを、あやしげにご覧じて、はかばかしくも召さで、臥させたまひぬれば、また添ひ臥しまゐらせぬ。16)

六月二十日以後、天皇の容態が悪化一路であったため、充分な休息の暇もない長子であるが、食膳の奉仕にまたも呼ばれる。帝の意に添いこまやかな心遣いで給仕できる女房が、ほかにいないからである。食事のため抱き起こされた天皇の姿は、衰弱の様子が甚だしい。しかし、その苦しい息の下から天皇は、長子に関白の参上を告げる。その天皇の優しい思いやりに長子は思わず涙ぐむ。

君臣一体の微笑ましい場面であるが、ここで一つ考えなくてはならないことがある。当時、典侍は、役目の上天皇の側近たちと直接交渉をもち、直接姿を見られる立場にあった。次の『源氏物語』の中の源典侍の場合を見てみよう。

> この内侍常よりもきよげに、様体頭つきなまめきて、装束ありさま、いとはなやかに好ましげに見ゆるを、（中略）裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはほりのえならずゑがきたるをさし隠して見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。17)（「紅葉賀」）

16）前掲書 pp.400-401

17）『源氏物語』の本文引用は、阿部秋生他（1994）の新全集本（小学館）による。以下同様。② p.337

www.kci.go.kr

長年宮中に勤め帝の信頼が厚い高級女官源典侍は、桐壷帝の御梳櫛に奉仕し、その際に、光源氏によって細部にいたるまで見顕わされている。

つまり、当時典侍の身分にあれば、天皇の側近たちの目に触れることは避けられないことであったが、堀河天皇は、長子を「我が女」として特別扱いし、男性官人に晒されないように思いやったのである。その天皇の優しい心遣いに感激した長子は、そのエピソードを日記の中に書き綴り、他の典侍より自分に親密な関わりを持っていた堀河天皇を回想するのである。

次のエピソードは、それをより明確に示す。

> かくおはしませば、殿も夜昼たゆまず参らせたまへば、いとどはれにはしたなき心地すれば、三位殿も、「をりにこそしたがへ。かばかりになりにたることに、なんでふものはばかりはする」とあれば、いかがはせんとて過ぐす。
> 大殿近く参らせたまへば、御膝高くなして陰に隠させたまへば、われも単衣を引き被きて臥して聞けば、「御占には、とぞ申したる、かくぞ申したる。御祈りは、それそれなん始まりぬる。また、十九日より、よき日なれば、御仏御修法のべさせたまふ」と申させたまへば、「それまでの御命やはあらんずる」とおほせらる。かなしさ、せきかねておぼゆ。18)

天皇が危篤状態に陥る緊急事態だから、関白も夜昼なく参上する。天皇の傍で添い臥しをしながら常に看病にあたっている長子は、緊張の連続であるが、そんな長子の心中を察している天皇は、苦痛の中でも膝を高くして長子を関白の目から隠そうとする。死を目前にし緊迫した状況の下で起こった心和む出来事の一齣で、天皇の細かい気遣いに長子はこの上なく感動を覚える。この「御膝の陰」のエピソードは、下巻で二回もまた語られるようになる19)。

では、堀河天皇の行動のどういう点がそれほど長子を感動させたのだろうか。

上述したように、典侍は天皇の側近くに仕えて、臣下が天皇に対して提出する文書を取り次いだり、天皇の命令を臣下に伝えたりしたので、男性の官人に晒されるのは当たり前であったが、典侍にはもう一つの大事な役目があった。天皇の添い臥し（侍寝）である。

堀河天皇は、虚弱な体質で、嘉承二年（一一〇七）以前にも病に臥すことが多かった。『殿暦』や『中右記』から作者の出仕（康和二年）後の記録を抽出してみると、康和四年（一一〇二）に三回、康和五年（一一〇三）に一回、長治元年（一一〇四）に一回、長治二年（一一〇五）に二九回、嘉承元年（一一〇六）に二九回、嘉承二年に八回（六月二十日の発病以前）となる。病がちな堀河天皇の傍らで看護をしながら世話をする人が必要であったし、長子がそれを担っていたと見られる。

18）前掲書 pp.401-402

19）太田たまき（1999）「讃岐典侍日記―『隠される典侍』と『さらされる典侍』」（『大学院研究年報（文学研究科編）28）には、「隠される典侍」から「さらされる典侍」へと典侍としての質の変化があり、長子は鳥羽朝では異質感を感じて孤立感に苛まれたことが論じられている。pp.14-21

www.kci.go.kr

長子は、手厚い看病で堀河天皇の病気を平癒へと導いたのであるが、それには後宮的な役割も含まれていたであろう。長子は、堀河天皇から寵愛を受けた、いわゆる愛妾だったのである[20]。堀河天皇が関白の忠実の目に晒されないように膝を立てて長子を隠したのも、それと深く関わっていると思われる。堀河天皇の異例的な行動には、寵姫を引き付けて離さないことへのはにかみがあったのではないだろうか。長子は、それを特筆せずにはいられなかったのである。

そのように堀河天皇の傍らでは関白の忠実の目を憚っていた長子であるが、堀河天皇の死後は、摂政になった忠実と対面をし直接会話を交すようになる。

> 昼つかた、殿参らせたまひて、人々ゐなほりなどすれば、ものを参らせさして立たんも、おとなにおはしまいしにぞ、さやうのをりもわかず立ちしか、また、おとなしうなども告げさせたまひしか、これは、うちすてて立たば、よきことやいはれんずると思へば、なほゐたるも、かくこそありがたかりけることを心にまかせて過ごしけん年月を、いかで思ひ知らざらん。はしたなく思へば、うちうつぶしてゐたれば、御障子の外にゐたる人たちに、「あれは、たそ」と問はせたまふ御声、聞ゆ。「それ」といらふるなめり。御障子のうちに近やかについゐて、「いつよりさぶらはせたまふぞ。今よりはかやうにてこそは。その昔の思い出でられたまひて恋しきに、そのかみの物語してなぐさめん」などある、いとかなし。[21]

長子が鳥羽天皇の下に再出仕した、嘉承三年（一一〇八）正月三日の記事であるが、参上した摂政右大臣藤原忠実は再び宮中に出仕している長子に驚き、近づいて声をかける。そして、亡き堀河天皇が懐かしいので、堀河天皇の時の思い出話でもしようと誘い、例の「御膝の陰」のエピソードを語る。その話を聞いた長子は、堀河天皇に対する追慕の情でまたも悲嘆するのである。

以上のように、『讃岐典侍日記』の作者長子は、堀河天皇の死という重大事に直面し、臨終前の病悩の様子をつぶさに描きながら、その一方では天皇との「私」のエピソードを挟み込み、漢文日記には見られない、個性的な「堀河天皇の崩御記」を形成していると見られる。

4. 内密な「私」の場面の露出

上巻において看病の記録の合間に「私」のエピソードを語り、自分と天皇との特別な間柄を強調しようとした長子は、鳥羽天皇に再出仕してからの出来事を書き綴る下巻において

20）今井源衛（1961）「讃岐典侍日記」（『国文学　解釈と鑑賞』26-2）pp.37-42

21）前掲書 pp.441-442

www.kci.go.kr

はより大胆になる。堀河天皇に対する長子の私的な感懐は、特に一周期以降の記事に顕著に表わされるが、それを新全集本の小見出しで示してみると、次のようになる。

<15> 八日、内裏行幸に奉仕し、昔を思う
<16> 鳥羽天皇のそばに臥して、堀河天皇を思う
<17> 前栽をながめて、堀河天皇を思う
<18> 九月、笛の譜の跡を見て、堀河天皇を思う
<21> 五節につけて、ありし日の雪の朝を思う
<22> 押し出につけて、堀河天皇を思う
<23> 退出するにつけて、堀河天皇を思う

作者は、ほぼすべての場面において堀河天皇を思い出しており、仕えた八年間の出来事を想起する。作者と堀河天皇との関係がいかに深く親密であったかが強く打ち出されるのであるが、そのような観点から「<15> 八日、内裏行幸に奉仕し、昔を思う」記事は、注目に値する。

六月になりぬ。暑さ所せきにも、まづ、去年のこのころは、こともなく御心地よげに遊ばせたまひて、堀川の泉、人々見んとありしを、何とおぼしめししにか、あながちにすすめつかはししかば、（中略）待ちつけて、泉の有様うちうちに問ひなどして、「扇引き、今宵は、さは」とおほせられしかば、「明けんが心もとなさに今宵と思ふに、人たちのけしきの暗くて見えざらんこそ、くちをしさぶらへ」と申ししかば、つとめて、明くるやおそきとはじめさせたまひて、人たち召しするゑて、大弐の三位殿をはじめてゐあはれたりしに、「まづ、引け」とおほせられしかば引きしに、うつくしと見しをえ引きあてで、なかにわろかりしを引きあてたりしを、うへに投げおきしかば、「かかるやうやある」とて、笑はせたまひたりしことを、但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。こと人はえせじ」など興じあはれしに、そのをりは何ともおぼえざりしことさへ、いかでさはしまゐらせけるにかとなめげに、今日は、ありがたくおぼゆる22)。

嘉承三年（一一〇八）六月のことであるが、堪えがたい暑さに、去年の夏、堀川の泉に遊んだことが思い起こされ、それが扇引きの思い出につながっていく。美しい扇を引くことができずに、見劣りのするものを引き当てた長子は、堀河帝の前に投げるように置いてしまうが、そういう長子の自分勝手な行動をも天皇は優しく包み込んでくれる。そこで但馬殿という女房に「家の子の心なるや。こと人はえせじ」と語られたという。

下線部「家の子」とは、主人と血縁関係がある者か、それ同様に親しい者をさし、堀

22）前掲書 pp.450-451

www.kci.go.kr

河天皇と長子の関係が「私」的であることを表わす。次の『源氏物語』の例を見てみよう。光源氏は、

> 一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。（「桐壷」）23)

と、桐壷帝から「私物」として可愛がられている。また、若紫（紫上）は、

> むすめなど、はた、かばかりになれば、心やすくうちふるまひ、隔てなきさまに臥し起きなどは、えしもすまじきを、これは、いとさま変りたるかしづきぐさなり、と思いためり。
>
> （「若紫」）24)

と、光源氏から「かしづきぐさ」として愛されている。

「私物」や「かしづきぐさ」は秘蔵っ子の意味であり、上述の「家の子」も同様の意味に見られる。「家の子」は、例えば、

> 人さはに　満ちてはあれども　高光る　日の大朝廷　神ばがら　愛での盛りに　天の下奏したまひし　家の子と　選ひたまひて」　（『万葉集』　巻五　八九四）25)

のように、万葉時代から「身内、内輪」の意味として用いられていた26)言葉である。それは、上記のエピソードの中で但馬殿という女房の続く言葉「こと人はえせじ（とても他の人には真似のできない堀河天皇が長子を思う行為である）」によっても裏付けられる。

結局、堀河天皇が長子に対して抱いた思いは、『源氏物語』において桐壷帝が光源氏に持つものや光源氏が紫上に持つものに近似したものであり、この場合、本当の血縁関係ではないので、最愛の女性に対して抱くものとなる。『讃岐典侍日記』の作者長子が表現や叙述の上で『源氏物語』を参照した可能性は排除できないが、ここで注意したいのは、作者が堀河天皇にとって最愛の相手だったことを周りの人の発言を引いて書き記している事実である。

では、長子は、なぜここまで自分が特別であったことを強調しなければならなかったのだ

23）前掲書① pp.18-19

24）前掲書① pp.261-262

25)『万葉集』の本文引用は、小島憲之他（1994）の新全集本（小学館）による。① p.73

26) 大倉比呂志（2007）「『讃岐典侍日記』と通過儀礼」（『王朝文学と通過儀礼』竹林舎）。pp.203-219

www.kci.go.kr

ろうか。

堀河朝において典侍は、五人いた[27]とされる。名前と補された時期を示すと、次のようになる。

藤原宗子　寛治七年十二月十五日　初見
藤原房子　寛治八年四月五日　補
源仁子　承徳二年三月七日　補
藤原長子　康和三年十二月三十日　補
源頼子　康和四年四月十一日　補 [28]

当時の典侍の位階は、年功序列式だったと見られるので、出仕が遅い方だった長子は、比較的低い地位にあったと思われる。そのように地位の上では軽い方だった長子は、天皇に「家の子」と呼ばれるくらい[29]、特別な位置を占めていたことを述べたかったものと考えられる。

「<21>五節につけて、ありし日の雪の朝を思う」場面は、より意味深長である。

童のぼらんずる長橋、例のことなれば、うちつくり参りてつくるを、承香殿の階より清涼殿の丑寅のすみなるなかはし戸のつままでわたすさま、昔ながらなり、御前、めづらしうおぼして御覧ずれば、暮るるまで御かたはらにさぶらふにも、雪の降りたるつとめて、まだ大殿ごもりたりしに、雪高く降りたるよし申すを聞こしめして、その夜御かたはらにさぶらひしかば、もろともに具しまゐらせて、見しつとめてぞかし、いつも雪をめでたしと思ふなかに、ことにめでたかりしかば、あやしのしづがやだに、それにつけて見所こそはあるに、（中略）をりからなればにや、御前の立ちしは、せめてのわが心の見なしにや、かかやかしきまでに見るに、わが寝くたれの姿、まばゆくおぼえしかば、「常よりみめまほしきつとめてかな」と申したりし、をかしげにおぼしめして、「いつもさぞ見ゆる」とおほせられて、ほほゑませたまひたりし御口つき、向かひまゐらせたる心地するに、[30]

年中行事の中で最も賑わう行事の五節に際し、長子はまたも堀河天皇と過ごした過去に遡っていく。堀河天皇の最後の五節の雪の朝が思い起こされ、それが亡きわが君と二人

27）ここでは、東宮の乳母が即位とともに典侍に任命される「乳母典侍」は外して、最初から典侍に任命された場合だけを取り上げた。堀河天皇に「乳母典侍」は三人いた。

28）守屋省吾(1971)「堀河帝の後宮―讃岐典侍日記形成の背景」（『平安文学研究』47）p.124

29）それには、そのバックに、長子を典侍に導いてくれた姉の兼子（藤三位）が乳母典侍としてかまえていたことも働いたであろう。

30）前掲書 pp.464-465

www.kci.go.kr

だけで過ごした雪の朝の思い出だったことが反芻される。鳥羽天皇の幼い声に現実に引き戻されるまで、長子は恍惚の境にあった。いわば、作者長子の堀河天皇との美しい思い出は、ここで最高潮に達すると言ってよい。

ところで、上記の場面で堀河天皇と供にした最後の五節の雪の朝は、添い臥し（「御かたはらにさぶらひしかば」）をしてから迎えた朝である。帝の押し開けた戸は、滝口の透垣の向うに立つ前駆役の武士からも見えそうな、そしてそのあたりでの雑仕の言葉がはっきり聞き取れる距離にあった。滝口が集まり立っているのは、初雪や深雪の折り、初雪見参（これにより禄を給う）の習慣か、これに伴う雪山作りへの奉仕による31)ものと見られるが、彼らにはそれと知られるはずもない添い臥しの後の寝起きの姿と、愛情を込めてそれに応じる天皇との会話が繰り広げられる。起き出たばかりの姿を恥じらいながらも寄り添う長子に対して優しく微笑みながら戯れを口にする天皇。二人の会話は、まるで恋人の間で交される睦言そのものである。

長子が恥じる「わが寝くたれの姿」は、共寝の夜を過ごして起きたばかりの女性の朝顔をさす。当時朝顔は、例えば和歌の中に、

朝顔の花前にありける曹司より、男のあけて出で侍けるに
よみびとしらず
もろともにおるともなしに打とけて見えにける哉朝顔の花
（『後撰集』恋　七一六）32)

と詠まれるように、実際の花に喩え、一夜の情事の明けた時の姿態の表情として主題化される場合が多かった。朝顔は一夜を供にした男からの眺めであり、女性はそれを恥じて嘆くのが一つのパターンだったのである。上記の場面において、長子が自分の朝の顔を恥じるという文脈は、当時の人々に天皇との共寝を連想させるに充分な象徴性をもっていたに違いない。

そのように、堀河天皇との内密な場面を書き綴ることは、「<23>退出するにつけて、堀河天皇を思う」場面において、より露骨になる。

道すがら、心やすく夜のふけぬさきに出づるにつけても、もののみぞあはれなる。（中略）さぶらひしをり、ふけしさまは所せかりし心地せしものを、まして、出でよろこびすとて、わびさせんとおぼしめしたりしをりは、あやにくがりて、とみにも御手もふれさせたまはざりしものを、いそぎてまかでんと思ひし夜のことぞかし、宮の御かたにわたらせたまひて、夜のふくるまで帰ら

31）嘉承二年（一一〇八）十二月三日の『殿暦』には、「今夜雪六寸許り。内并びに中宮御方に雪山の事有り。滝口屋上に昇り、所の衆山を造る。宮の御方の山、余の従身并びに侍等之を造る」とある。

32）『後撰集』の本文引用は、片桐洋一（1990）の新大系本による。p.209

www.kci.go.kr

せたまはざりしに、からうじて待ちつけまゐらせて、すすめまゐらせしを、いかで心得させたまひたりしにか、まかづることおほせられしかば、「さにさぶらふ」と申したりしを聞かせたまふままに、うち臥させたまひて、「今宵は明けがたに何ごともせん。ねぶたし。寝なん」とおほせられて、とおほせられて、「いかにつきなうぞ見あへるものかなと思ふ人あらん」とほほゑませたまひておほせられしかば、「われは何の心にかさまでは思ひたまへん。待ちゐたる供人、いづみなどこそ、わびしからめ」と申せば、33)

鳥羽天皇の御所から仕事を終え退出する車の中で、緊張がほぐれ堀河天皇との思い出が浮かんでくる。天皇は、わがままを承知で長子の退出を引き止めるが、引き止めては気を兼ね、軽口の奥にいたわりを覗かせる。長子は、まさに風流で理想的な天皇の姿を描いていると言えるが、それにはより濃密な意味が含まれている。

当時、典侍は、上述したように、天皇の添い臥し、すなわち侍寝をも勤めており、その結果、皇子や皇女を儲ける場合もあった。平安時代後期に、摂関・大臣となる家が固定化し、一人の天皇に対し女御・更衣として正式に入内する女性の数が少なくなったためである34)。堀河天皇の父である白河天皇においても、この上なく愛した中宮賢子の死後、もっぱら側近くに仕える女房を寵愛していた。堀河天皇も、典侍仁子女王や藤原宗子との間に皇子女を儲けている35)。長子が出仕したのも、そういった役目をも考慮に入れてのものだったことは想像に難しくない。

堀河天皇の後宮には、天皇の叔母にあたる篤子内親王が中宮として存在していたが、天皇より十九歳年長であり、皇子女の誕生を期待するには年齢的に無理のあることであった。また、正式な女御として入内した、閑院流藤原氏出身の苡子は、康和五年（一一〇三年）に宗仁親王（後の鳥羽天皇）を出産してから早世している。長子のような天皇の秘書役である典侍たちには、天皇の夜伽を勤める機会が自ずと多くなったのである。

その一方で当時の典侍は、別に結婚もしていた。当時は一夫一妻制ではなく、妻を多数持つのが一般的だった上、天皇にとって典侍は普通の男女関係とは異なって、主従関係に近い。天皇にとって典侍の夫は、典侍が宮中で長く働けるようにサポートする後援者であり、典侍の夫にとって天皇の存在は、官位上昇や受領就任のための重要情報が得られるソースになるのである。

上記の場面において、長子は結婚していた可能性が高く、本文の中で「いそぎてまか

33) 前掲書 pp.468-469

34) 後三条天皇は典侍藤原行子・掌侍平親子を寵愛してそれぞれに男子を産ませたが、両者を女御・更衣などの正式な皇妃としなかった。

35) こうした側近の女官・女房から生まれた皇子の多くは幼くして出家したが、二条天皇と内裏女房の伊岐致遠女の間に生まれた六条天皇が即位したのをはじめ、正式な后妃に皇子がない場合や政治情勢により、天皇となることもあった。高倉天皇と典侍藤原殖子との間に生まれた後鳥羽天皇の即位により、生母殖子は女院となっている。

www.kci.go.kr

でん」ことは、夫が待っていることで、「出でよろこびす」ことは、家に帰って済ますべき夫との用事であると思われる。典侍の長子には昼間の公務以外に天皇の添い臥しの役目もあるが、本文の中にあるように、当夜堀河天皇は中宮のところに行ってきており、長子は家に帰ることになっていたのであろう。それなのに天皇は、夫との大事なことがあって退出しようとする長子を引き止めようとしたのである。それは、天皇の方がしばし主従関係であることを忘却し、長子の夫に嫉妬のような感情を持ったことによるのではないか。それに、長子の方も、そのような天皇の思惑を感じ取りつつも、退出渋滞で困っている人は私ではなく供をしようと待っている人々である（「われは何の心にかさまでは思ひたまへん。待ちゐたる供人、いづみなどこそ、わびしからめ」）と、わざと迂濶に答える。堀河天皇と長子は、長子の夫の存在を排除することによって一体感を分かち合えているのである。わがままを言う天皇の心には長子に対する愛情が潜まれており、それを感じた長子は幸わせを感じる。作者長子は、過去のことを回想して堀河天皇に愛される幸わせを再び吟味しながら、二人だけの内密な場面を美麗な文章によって細かく再現し、自分だけの個性的な日記の世界を構築しているのである。

5．おわりに

以上で見てきたように、『讃岐典侍日記』は堀河天皇の病気とそれに続いての崩御や、その後の追慕の念を記した日記ではあるものの、天皇の近くに侍する典侍という公的な立場ではなく、あくまでも作者長子の「私」の視点によって書かれた世界として見ることができる。

まず、「堀河天皇の看病記」の上巻においては、公的な時間の枠組みに依拠して示される漢文日記とは異なって、きわめて主観的な時間に基づき、天皇の生の姿がつぶさに写し出される。また、天皇の死の絶体絶命の瞬間を描く合間に、天皇からの寵愛ぶりを表わす「私」のエピソードを挟み込み、個性的な文脈をなしている。

また、「堀河天皇の追慕記」の下巻においては、亡き天皇に対する私的な感懐がより強くなり、鳥羽天皇に仕えるほぼすべての場面において堀河天皇が思い出され、中でも、自分勝手な行動をも優しく包み込んでくれた天皇と「家の子」と言われたことや、五節の雪の朝を供にし優雅な言葉を交わしたこと、そして天皇に退出を引き止められ軽口を言われたことなどは、特筆される。これらの場面は、いづれも二人の親密な関係を表わすもので、愛妾であった長子が天皇の添い臥し、すなわち侍寝をしたことを連想させる濃密なものになっている場合もある。

結局、『讃岐典侍日記』は、天皇という至尊の傍らに侍して病気と崩御の過程を書き

www.kci.go.kr

記すという公的な立場から出発しているとはいえ、外在する公的な枠組みからははみ出た、あくまでも内密な「私」の世界を作り上げていると見られる。叙述対象である天皇は、敬慕すべき至尊としてではなく、病床に苦吟する一人の人間として、また寵姫を優しく思いやる一人の男性として描かれる。作者讃岐典侍は、天皇という「公」的な存在を理想的な恋の相手へと変質させるところに「私」の視座を見付け出し、男性の漢文日記とは異なる、個性的な世界をなしていると思われる。

www.kci.go.kr

【參考文献】

・石井文夫（1994）『讃岐典侍日記』（新編日本古典文学全集 小学館）pp.391-392、pp.392-393、pp.393-394、pp.417-418、pp.400-401、pp.401-402、pp.450-451、pp.464-465

・阿部秋生他（1994）『源氏物語』（新編日本古典文学全集　小学館）①②　pp.18-19、pp.261-262、p.337

・小島憲之他（1994）『万葉集』（新編日本古典文学全集　小学館）②　p.73

・片桐洋一（1990）『後撰和歌集』（新日本古典文学大系　岩波書店）p.209

・宮崎荘平（1989）「宮廷女房日記の展開―中古から中世へ」（『日記・随筆・記録（日本文学講座）』7 大修館書店）pp.110-129

・森田兼吉（1995）「記録としての日記の考察―日記文学前史」（『日本文学研究（梅光女学院大学）』30）pp.29-42

・岩佐美代子（1993）「女房の日記」（『語文（日本文学）』85）pp.6-17

・武藤菜海（2010）「『讃岐典侍日記』執筆意図とその背景について」（『国文目白』49）pp.180-189

・守屋省吾（1990）「『讃岐典侍日記』の作者藤原長子」（『女流日記文学講座第四巻』勉誠社）pp.258-272

・木下順子（1992）「『讃岐典侍日記』成立の背景―出仕した八年をめぐって」（『新樹』5）pp.1-10

・石坂妙子（2003）「〈典侍〉讃岐の日記―『栄花物語』の継承」（『王朝女流文学の　新展望』竹林舎）pp.45-61

・太田たまき（1997）「『讃岐典侍日記』に見る典侍の局と天皇の行動範囲の一考察」（『日記文学研究』　2）pp.266-276

・森本元子（1990）「『讃岐典侍日記』の成立―その心理と経緯」（『女流日記文学講座』第四巻 勉誠社)。pp. 213-227

・ 太田たまき（1999）「讃岐典侍日記―『隠される典侍』と『さらされる典侍』」（『大学院研究年報（文学研究科編）28）pp.14-21

・大倉比呂志（2007）「『讃岐典侍日記』と通過儀礼」（『王朝文学と通過儀礼』竹林舎）pp.203-219

・今井源衛（1961）「讃岐典侍日記」（『国文学　解釈と鑑賞』26-2）pp.37-42

www.kci.go.kr

要 旨

『讃岐典侍日記』は、日記名から明らかなように、堀河天皇に典侍として仕えた讃岐（藤原長子）によって書かれた日記文学である。『讃岐典侍日記』は、公的な性格の日記というには、個人的な視点に立っての主意的な筆致が多く、また身辺雑記というには記述対象が公的に過ぎる。本稿では、作者長子が典侍という公的な立場から出発しつつ、いかにして「私」の世界へと移行していくかのことについて考え、女房日記の文学性をどこまで認められるかの問題に一つの方向性を示してみた。

まず、「堀河天皇の看病記」の上巻は、公的な時間の枠組みに依拠して示される漢文日記とは異なって、きわめて主観的な時間に基づき、天皇の生の姿をつぶさに写し出している。また、天皇の死の絶体絶命の瞬間を描く合間に、天皇からの寵愛ぶりを表わす「私」のエピソードを挟み込み、個性的な文脈をなしている。

また、「堀河天皇の追慕記」の下巻は、亡き天皇に対する私的な感懐をより強くし、鳥羽天皇に仕えるほぼすべての場面において堀河天皇を思い出すが、中でも、自分勝手な行動をも優しく包み込んでくれた天皇と「家の子」と言われたことや、五節の雪の朝を供にし優雅な言葉を交わしたこと、そして天皇に退出を引き止められ軽口を言われたことなどを、特筆する。これらの場面は、いづれも二人の親密な関係を表わすものであり、中には愛妾であった長子が天皇の侍寝をしたことを連想させる濃密なものになる場合もある。

結局、『讃岐典侍日記』は、天皇という至尊の傍らに侍して病気と崩御の過程を書き記すという公的な立場から出発しているとはいえ、外在する公的な枠組みからははみ出た、あくまでも内密な「私」の世界を作り上げていると見られる。叙述対象である天皇は、敬慕すべき至尊ではなく、病床に苦吟する一人の人間として、また寵姫を優しく思いやる一人の男性として描かれる。作者讃岐典侍は、天皇という「公」的な存在を理想的な恋の相手へと変質させることに「私」の視座を見付け出し、男性の漢文日記とは異なる、個性的な世界をなしていると思われる。

キーワード：『讃岐典侍日記』、女房日記、典侍、公、私、追慕、堀河天皇、天皇の死

투　　고：2013. 8. 31
1차 심사：2013. 9. 14
2차 심사：2013. 10. 5

www.kci.go.kr